



ラブール警部「食べ残しは捨ててはいけません！」

Yoshiyuki Murakami



ある晴れた日、頼もしい犬の警察官であるラ  
ブル警部は、にぎやかな街のパトロールに出かけ  
ていました。街で一番人気のレストランからは、い  
つも香ばしくて美味しそうな匂いが漂ってきます。



レストランの中をのぞくと、子ぶたのピップがテーブルいっぱいにごちそうを広げていました。しかしピップはほんの少し食べただけで、「もうお腹いっぱい！」と言って、たくさんの料理をゴミ箱に捨てようとしています。



「そこまでだ！食べ残しを捨ててはいけません！」ラブール警部が颯爽と店内に駆け込み、きっぱりとした声でピップを呼び止めました。ピップは突然の警部の登場にびっくりして目を丸くしました。



ラブール警部は優しく語りかけます。「この野菜や米を育てるために、農家の人たちが毎日汗を流して働いているんだよ。シェフもみんなが笑顔になるように心を込めて作ったんだ。」



警部の話を聞いたピップは、たくさんの人の努力や命の恵みについて考えはじめました。自分の我儘な行動を反省し、胸がキュッと締めつけられる思いがしました。



「でも大丈夫、残った料理はおうちに持ち帰って後で食べればいいんだよ」とラブール警部は提案しました。警部は持ち帰り用の可愛いボックスを用意し、綺麗に包んでくれました。



食べものを大切にする方法を知ったピップは、嬉しそうにボックスを受け取りました。注文するときも「自分が食べきれる量」を考えることが大切だと学んだのです。



その日の夜、ピップは持ち帰ったごちそうを家族みんなで温め直して食べました。「やっぱりとっても美味しいね！」と、みんなの顔に笑顔がこぼれました。



ラブール警部の教えは街中に広まり、レストランでは「食べ残しゼロ」の取り組みが始まりました。街の動物たちはみんな、食べ物に感謝しながら美味しく残さず食べるようになりました。



青空の下、きょうもパトロールを続けるラブール警部は満足そうに微笑んでいます。「食べものを大切にして、今日もみんな元気に過ごそうね！」警部の温かい声が街に響き渡るのです。